

都市空間の領域認識についての基礎的考察

京都大学大学院工学研究科 学生員 ○厚井 理沙

京都大学大学院工学研究科 正会員 菊池 輝

京都大学大学院工学研究科 正会員 北村 隆一

1. はじめに

郊外では公園や集会所，商業施設など，人々が日常的に交流できる公共領域が十分に整備されている．しかしながら，そこで子供達が遊ぶ姿や人々が交流する姿を目にすることは少なく，現在郊外はコミュニティの希薄さが指摘される地域となっている．この原因として，郊外に存在する公共領域は，人々に公共領域として認識されていない可能性があると考えられる．このような背景から，本研究ではまず，人々が公共領域を認識する際に影響を与えている要素を明らかにする．さらに，都心部と郊外の公共領域の認識について比較を行うことにより，地域間での公共領域の認識の差異を明らかにすることを目的とする．

2. 公共領域の定義と仮説¹⁾

公共領域の定義として，社会学者 Oldenburg²⁾ の提案する“第3の場所”の概念と，Jane Jacobs³⁾ の提案する“偉大な都市”の概念を導入する．“第3の場所”とは，誰に対しても開かれた場であり，人々が日常的に交流できる場である．また“偉大な都市”とは，①十分に高い人口密度がある，②複数の機能を果たす，③街路は狭く曲がりくねっている，④古い建造物が存在する，の4条件を満たす都市である．本研究における公共領域とは，この2つの概念を満たす領域であるとする．そして人々が上記2つの概念を満たす領域を公共領域として認識すると仮定して，表1に示す仮説を設けた．

表1 本研究で指定した仮説

仮説1	人は 様々な人が集まる場所 を公共領域として認識する
仮説2	人は 雑多な活動の見られる場所 を公共領域として認識する
仮説3	人は 様々な施設の集まる場所 を公共領域として認識する
仮説4	人は 歴史的に形成されてきた場所 を公共領域として認識する

3. アンケート調査

これらの仮説を検証するため，本研究ではアンケート調査を行った．調査対象は，都心部と郊外に居住する1600世帯とし，住宅地図より無作為に抽出した．この際

に，都心部として京都市中京区の御池通り，四条通り，烏丸通り，寺町通りに囲まれる地域を，郊外として京都市西京区の洛西ニュータウンを選出した．調査票には，都心部，郊外それぞれから前述の仮説群を満たすと考えられる領域と，満たしていないと考えられる領域を10ヶ所選出し，それらの写真を提示した．また，仮説群をもとに設定した領域の印象を問う9項目の質問（表2参照）を設け，「全く思わない」から「全くそう思う」までの7段階の指標で回答を求めた．さらに，各領域に対して「どの程度公共的な場所であると思うか」という質問を設け，「全く公共的でない」から「非常に公共的」までの7段階の指標で回答を求め，各領域から受ける印象を計量化し，人々がその領域を公共的なものと認識しているかどうかを明らかにすることを試みた．なお，調査票は直接配布し，郵送により回収した．回収数は536部，回収率は33.5%であった．

4. 分析

公共領域を認識する際に影響を与えている成分を抽出するため，領域の特性に関する9つの質問項目の回答について主成分分析を行った．この際，アンケートの回答から得られた7段階の指標を1から7までの数値で表し，これらを標準化したものを投入変数とした．結果を表2に示す．

表2 領域特性評価の主成分分析結果

	成分	
	1.私的公共領域度	2.規範公共領域度
様々な人がいる	0.33	0.72
人々が様々な目的を持っている	0.26	0.78
社会的な交流が行える	0.51	0.54
にぎわいがある	-0.09	0.81
落ち着ける	0.86	0.00
自由にふるまうことができる	0.75	0.16
共有していると感じる	0.73	0.30
欠かせない場所である	0.62	0.32
歴史を感じる	0.22	0.48
因子負荷量	30.18%	28.13%

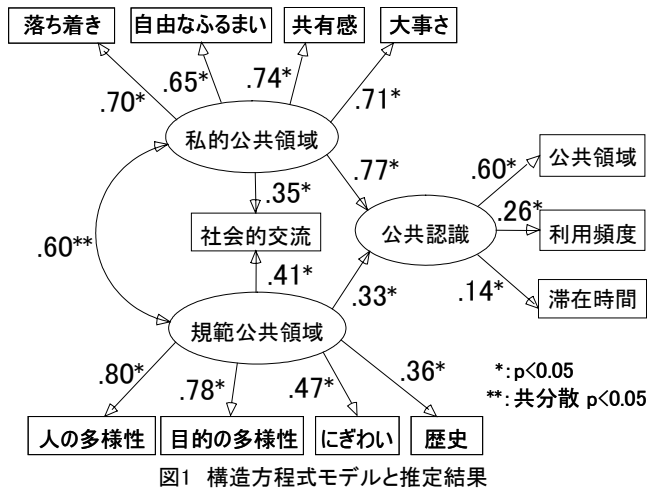
キーワード 公共領域 郊外 空間認識

連絡先 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻 TEL 075-753-5916

第1主成分は、公共空間における個人のふるまいや領域に対する愛着を示すと考えられる項目が高い負荷量を示していることから、「私的公共領域度」と名付けた。第2主成分は、上記の公共領域の定義を満たすと考えられる項目が高い負荷量を示していることから「規範公共領域度」と名付けた。主成分分析により、公共領域の定義を満たす規範公共領域度の他に、私的公共領域度という成分が存在し、これらの2成分が、公共領域の認識に影響を与えていることが明らかとなった。

5. 都心部、郊外の公共領域の認識

アンケートから得られた各測定指標及び主成分分析により抽出された2主成分が、公共領域の認識に与える影響について、構造方程式モデルを用いて検討を行った。主成分分析結果から、モデルにおいて2主成分は、外生変数であるアンケートの測定指標によって推定される潜在変数であるとした。さらにこれら2主成分によって、公共領域が認識されるとして、図1に示す構造方程式モデルを仮定した。推定を行った結果、仮定したすべての因果関係が有意なものとなった。この推定結果を図1に合わせて示す。



解析結果より、公共領域の認識には、規範公共領域度と比較して私的公共領域度が大きな影響を与えていることが明らかとなった。これは、上述の4つの仮説が強く支持されているとはいえない結果である。

さらに、郊外の公共領域を人々がどのように認識しているのかを明らかにするため、郊外居住者に着目し、都心部と郊外の公共領域について、認識の比較を行った。結果を表3に示す。

この表より、規範公共領域度は都心部の領域で、私的

表3 郊外居住者の都心部の領域と郊外の領域に対する認識のパラメータの差の検定

	私的公共領域			規範公共領域			公共認識			公共領域		
	β_1 ^{注1}	β_2 ^{注2}	t値 ^{注3}	β_1 ^{注1}	β_2 ^{注2}	t値 ^{注3}	β_1 ^{注1}	β_2 ^{注2}	t値 ^{注3}	β_1 ^{注1}	β_2 ^{注2}	t値 ^{注3}
私的公共領域							0.66	0.76	5.89**			
規範公共領域							0.44	0.34	3.31**			
落ち着き	0.64	0.69	-0.48									
自由	0.64	0.66	0.11									
共有感	0.65	0.81	0.53									
大事さ	0.64	0.71	2.38**									
社会的交流	0.25	0.33	0.51	0.50	0.39	-2.19**						
目的の多様性				0.78	0.74	-2.16**						
にぎわい				0.55	0.75	4.67**						
歴史				0.47	0.39	-2.43**						
人の多様性				0.76	0.83	-0.76						
公共認識										0.44	0.66	-2.38**

注1: 都心部の領域についてのパラメータ
注2: 郊外の領域についてのパラメータ
注3: パラメータの差のt値
**: p < .05

公共領域度は郊外の領域で有意に高い値を示していることがわかる。この結果より、本研究で定義した公共領域は、郊外と比較して都心部により豊富に存在している可能性があることがうかがえる。また、規範公共領域度と私的公共領域度が、それぞれ公共領域の認識に与える影響度が、都心部領域と郊外領域では逆転していることから、規範的公共領域は、私的公共領域度によって表される「人々が思うように過ごし愛着を感じるような領域」には必ずしもなりえないことが推察される。さらに、郊外居住者は、郊外の領域に対して「大事さ」、「公共領域」の項目が高い値を示していることから、人々が領域を公共領域として認識する際には、規範的な要素よりも、身近に存在し、生活に密着しているということが重要な要素となっていると考えられる。

6. 結論

分析により、公共領域の認識には、規範的な要素だけでなく、私的公共領域度という要素が影響を与えていることが示された。さらに、それら2つの要素のうち、私的公共領域度の影響が大きいということが明らかとなった。また、郊外の公共領域は、私的公共領域度という要素によって公共領域として認識され、規範的な公共領域が、必ずしも人々にとって身近で愛着の感じられる領域にはならないということがうかがえる。つまり Jacobs に代表されるような規範的な公共領域と、人々の認識における公共領域とは隔たりがあることが明らかとなった。今後は、領域を利用するという観点から、領域での居心地や近辺に居住する人々とのかかわりなど、これまでとは異なった公共領域の質的側面について改めて考える必要があるであろう。

参考文献：
1) 北村隆一編著：ポスト・モータリゼーションー21世紀の都市と交通戦略，学芸出版社，pp.211-242, 2001.
2) Oldenburg R.: The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Community Centers, Beauty Parlors, General Stores, Bars, Hangouts and How They Get You Through the Day, Paragon House, New York, 1991.
3) Jacobs J.: The Death and Life of Great American Cities, Random House, New York, 1961.